

3908  
卷 23

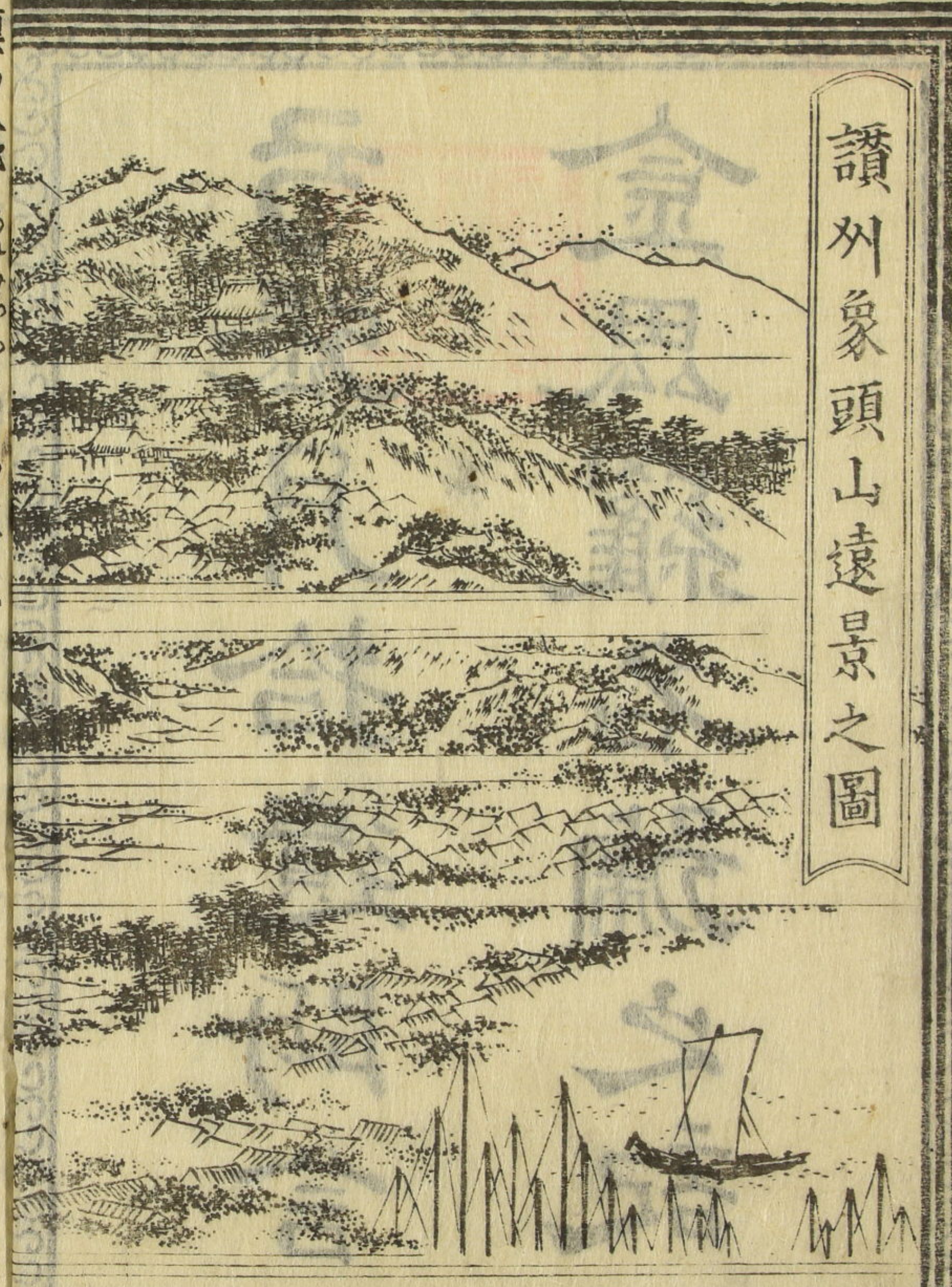
子張月拾遺所言  
金思羅名彌之記



金思羅名彌之記



讃州象頭山遠景之圖



鎮西八郎 椿説弓張月拾遺卷之五

東都 曲亭主人編次

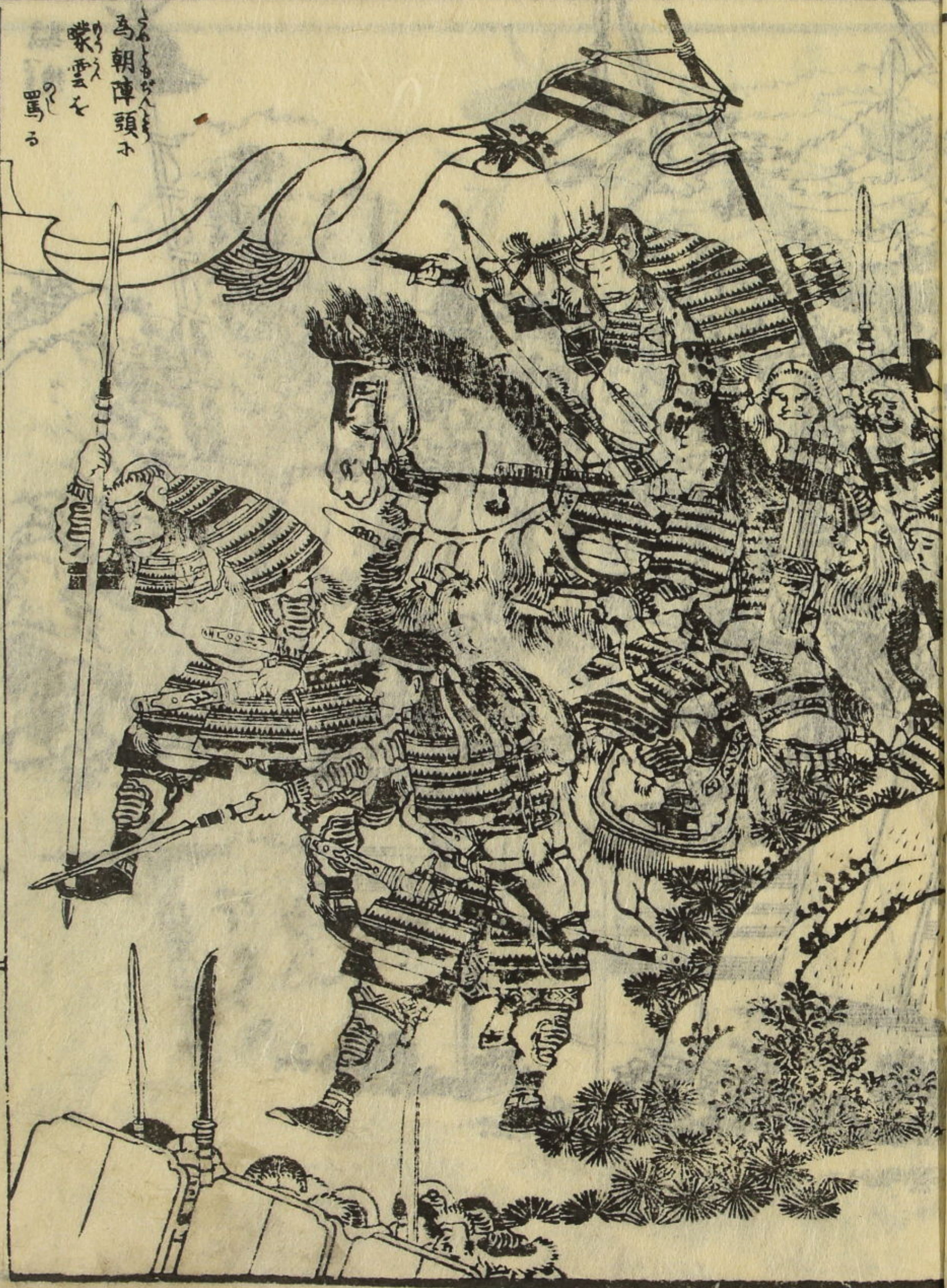
第五十六回

嶋袋を塞いで、霧雲為朝を焼く。餘煙を拂く王女良人と、素

為朝の武威中山を動し、逃れを追うてさしむ。矢を射く石虎山を  
取て要害とし、亦龍宮城を攻んとて、うち出くゆふに、任候をせむ。  
霧雲もつらら数、百騎を、おて金城まで出く。と報知らるる朝  
は、もあつた大に、松壽を、えんか、りて、方、う、ま、や、う。それ頃、日、地、圖  
を、見、て、お、れ、お、れ、彼、金、城、を、龍、宮、城、の、西、南、に、あ、り、て、大、里、に、背、き、を、と  
り、れ、今、その、前、より、攻、撃、す、王、女、後、より、これ、を、襲、う。一、挙、に、霧、雲、を  
擒、と、せ、ん、と、疑、ひ、し、速、に、奇、よ、き、て、只、管、馬、を、え、ん、と、す、人、を、

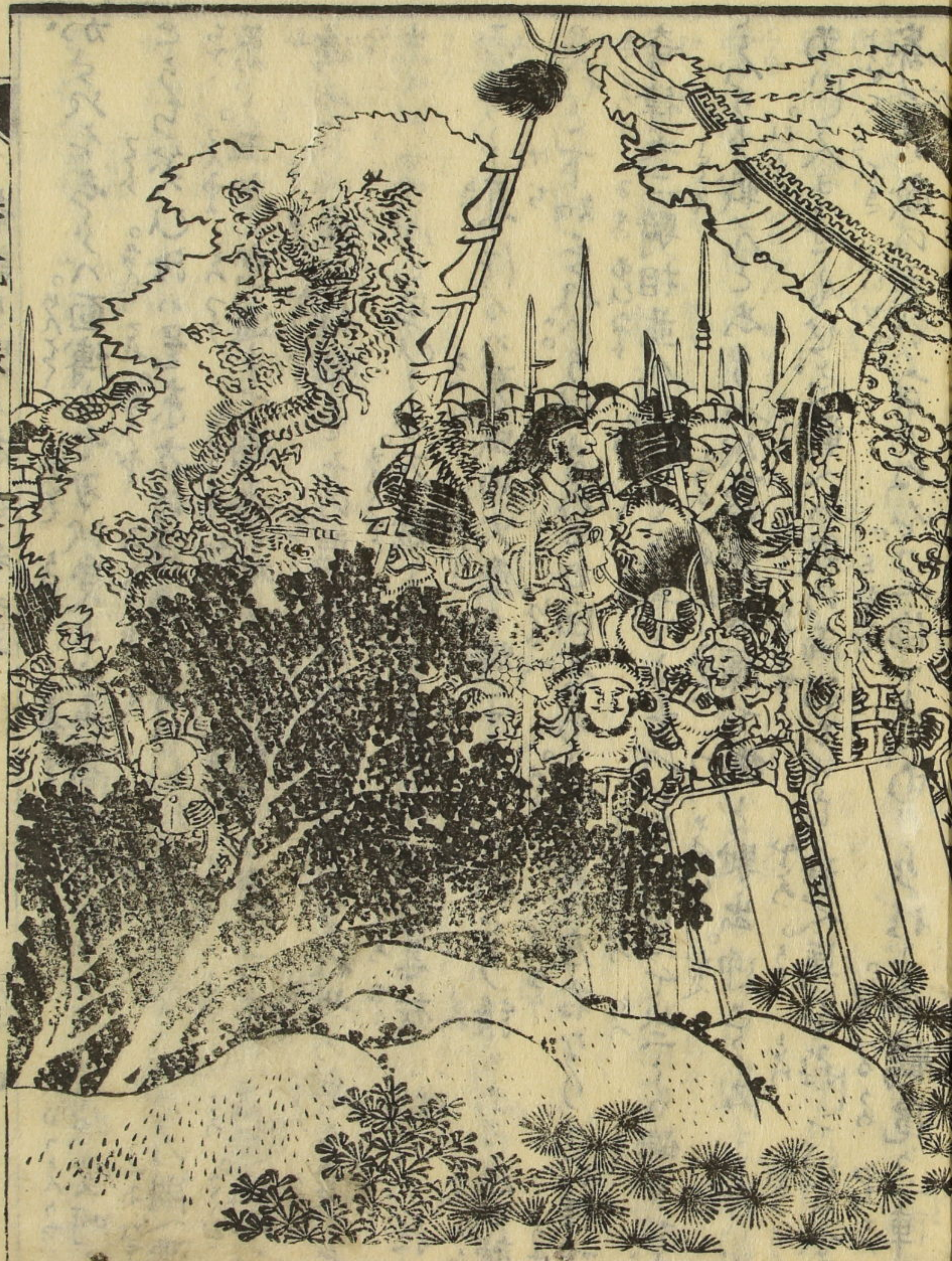


重藤の弓の握太なれ真中把て黄尾毛の馬の太く遅くは小孫  
 龍膽を金具の麻をる鞍に置け尊徳の鞍の越ゆるむかりなるは  
 かけて白旗の下にまゐるその形勢あつて成拂つてこの國人を目お  
 別とれ武者態威あつて猛りける天晴大將軍やとるるりに自身も  
 敵もあつて感嘆せざるなりける。當下為朝の鐘踏張り鞍  
 壺小突まわがりて霧雲を信と眼へ拘黨の悪僧いかなれは妖術を  
 逞し尚寧王を執逆して久しく王宮を踏あつて孰もその暴悪を  
 憎ざらん武名は荒磯をる浪の音にもはるる目の中も見えよ大日本  
 清和の嫡流八郎為朝とてつるるなり。そのつるる王女の縁し小孫れ  
 去年逆臣利勇と誅し。この秋更小義兵を起して汝を討て二首の  
 民の塗炭を救ふのなり。露るるもその非を悔ひ天罰脱れ

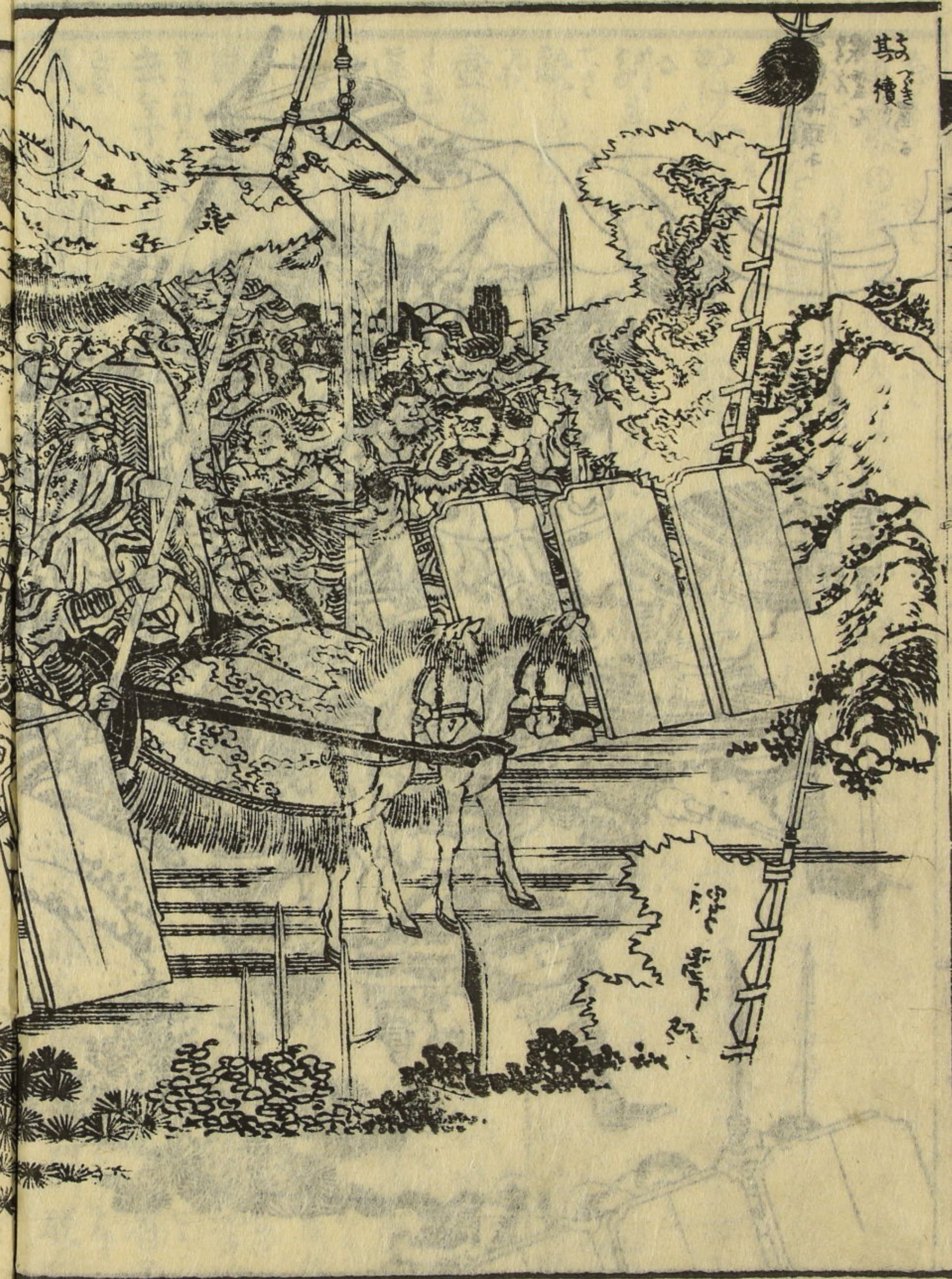


為朝陣頭  
 衆雲七  
 馬

春の月長月台貴長也五



和合山... 和合山... 和合山...



其後

和合山... 和合山... 和合山...

かゝるをあらば面縛して刃を受よと声高き罵りし。矇雲呵あら  
 とらち笑ひははは東方の浮浪人牙のあらむをば。この國は漂  
 蕩し。王女と密通して國王の婿と稱し。勢ひに乗じて大臣を殺し。王子を  
 逐つて山南を押領し。その悪公虎狼も勝れり。これ此の兵を遣して  
 生擒し。さしとてひし。が万機を暇むけは。年を放し。おんは  
 みづから身はるの夏虫の火虫の燈子より。母似たり。誰かある。這奴等  
 ぞれと下知されば。うけあつると回答つ。矇雲が左右なり。孫  
 奇律之二騎相並んで。奔くと馬より。それば。朝怒て。此も礙かせど。  
 こゝろ戦んと志す。小沢。推隔て。衝と馳出。迎と。み。戦。ハ  
 おい。人。ま。せ。も。せ。ど。戦。へ。賊。の。両。お。ち。う。ら。衰。へ。馬。を。飛。て。引。入。を。  
 寄。手。の。敵。の。大。勢。を。ぬ。を。入。侮。て。め。り。り。今。鶴。亀。の。一。陣。ハ

刺崩ををんて。いよく勇を勝誇られ。癖なれば。六直推し。追ふ。矇雲  
 矇雲騒ぐ。氣も。なく。空中を指振け。一羽の鳥雲。ま。い。降。り。  
 雲の中に一馬の異形の人馬。立。頭。れ。進。む。寄。手。を。け。隔。り。縦。横  
 を。尋。ね。戦。へ。松。壽。下。知。し。て。齋。に。た。れ。汚。穢。の。を。柄。な。が。れ。瓢。ハ  
 汲。り。け。し。て。ち。ち。と。泣。か。く。れ。ば。矇雲。が。魔。軍。紛。り。と。地。に。一。し。  
 墮。る。と。は。ら。し。る。れ。ば。或。は。青。紙。を。剪。て。兵。の。形。と。し。し。あ。る。ひ。し。  
 藁。束。移。て。馬。と。せ。り。され。む。こ。と。矇賊。が。奴。の。皮。を。剥。ぎ。た。れ。と。く  
 生。拘。れ。と。大。將。の。烈。き。下。知。し。諸。軍。兵。筋。を。く。れ。懸。火。揚。透。間。も  
 なく。競。ひ。か。れ。折。し。も。の。れ。矇雲。が。後。陣。の。う。こ。より。乱。を。騒。げ。を。  
 妖術。死。す。母。由。な。く。て。や。矇雲。も。車。火。か。く。て。慌。忙。き。脱。ん。と。を。朝  
 ら。を。商。し。て。賊。の。後。陣。より。乱。る。ハ。揃。手。の。軍。兵。出。身。り。て。その。背

よりの襲おそふなれをし。そとく東北とうほくのこを指塞さしづせ城しろへな入れそと采配さいはい  
 らら揮あ身方みかたに先まづら霧雲きりうんが車くるま小眼こまなをわけ追撃おひうちく多入おほいの賊軍ぞくぐん  
 いよく、途みちを失うしなひ龍宮城りゆうきゆうじやうへとほりもくは長川なががわをさして逃のがれを。  
 逢ま逢まと返へせと喚よとめて大将たいしやうふぐら追蒐おひごくまふを松まつまふくくありと  
 なくく霧雲きりうんかきり流ながの計はかりあり死しお且かつくさずりあり後ごと声を  
 かきりに叶あべども為な朝あさら耳みみにもわけごと中山山南ちゅうざんざんなんの境さかいあり茂林もくりん  
 のほとりに到いたるあお忽地いっぺん霧雲きりうんをえりしむひ士しをさおのくく流  
 まどひて左ひだり右みぎかと躊躇ちゆうぢう折ひくら天俄頃てんがくわん中結陰ちゆうけついん日ひの高たかれと野干玉のくわんぎよ  
 の圍まより圍まお入いりくく大将たいしやうと士卒しそくをさくは士卒しそくの大將たいしやうとえと風  
 さ入いりも烈はげしれお山鳴動やまなるとうて樹きと倒たふ。砂すなと飛とて面おもてをくくは  
 ぐお志しにも堪えがごとくも前後ぜんご左右さゆうも賊兵ぞくへい起おつく。乃な朝あを逃のがとる。

異口同音いこうどうおんに呼よびうけて射いる箭やを兩ふたよりは繁はげし。今いますて勇ゆうる  
 身方みかたの軍兵ぐんべい膽たんを冷ひやさびといひりのお。或あるは乱箭らんせん射倒いされ。  
 あらひの株かふ政まつき倒たふれおのが刃やいば刺傷つきまられ死しるりののくくくと  
 いの火ひあつた松壽鶴しょうじやく龜かめも賊軍ぞくぐんにけ隔へだらるらん乃朝なのこ  
 一騎いつきおかりたまひよけれと實まよれ鎧よろひを免まふべ。乃前な一條いつじやうも  
 うら火ひかごと馬うま入いり急いそひお急いそなりけり。其その首くびもあつたに数かず十  
 町幸ちやうきやうじて走はりたまふ火ひ光ひかり出いるえり。此こゝに活いるれらし  
 て彼火あを目標めくお。さかくして走はり着つきてえりあふ人家にやうかありあふ  
 ぞしていとも挑高てうたかれ森もりの中に燈籠とうろうを掛かけおるり。暖圍だんゐられが  
 らら拵かせぬ草葉くさば長ながく生茂あひままり。古廟こびやうくとえれハ廟やうもは。こ  
 何処どこあるらんとして僅わずかよてつくと燈火とうひあて彼此たがひをえりてくく入いる。



皇太子  
為朝  
為朝  
表



梅言巴里月林道卷六五

皇太子

樹下ふ勝余のりて。鳴袋の二字以て写す。その下に朱よりて細書し。為朝らんに到て死とんと書されば。讀も終らんと大に驚きた。この所と山南ふ属して大里へ遠くは縁と高き山は包れて東一方からで。おがれ門なし。まるにゆるて。鳴袋と名はけし。これ圍まふ。惑ひてあつども。こゝも走り入りし。これ敵り。出門を切塞んに。いくせして。門を去るを危い。なるとひより言ひて。響と引之し。馳せんとし。まふ。驟雲豫て。こゝり。まん。忽地。野の柴。なりて。出へ。門を塞だ。よけ。と。ば。為朝。ま。と。く。こゝ。う。驚。馬。より。閃。り。と。飛。び。下。り。つ。山。の。ご。と。に。積。め。げ。られ。柴。掻。退。ん。と。し。ま。あ。怪。い。う。ま。件。の。燈。籠。お。の。ぼ。く。撲。地。と。落。その。火。八。方。に。散。り。乱。して。秋。の。螢。の。飛。ぶ。ごと。樹。の。枝。草。葉。い。く。が。さら。ら。り。と。や。彼。積。れ。柴。中。の。

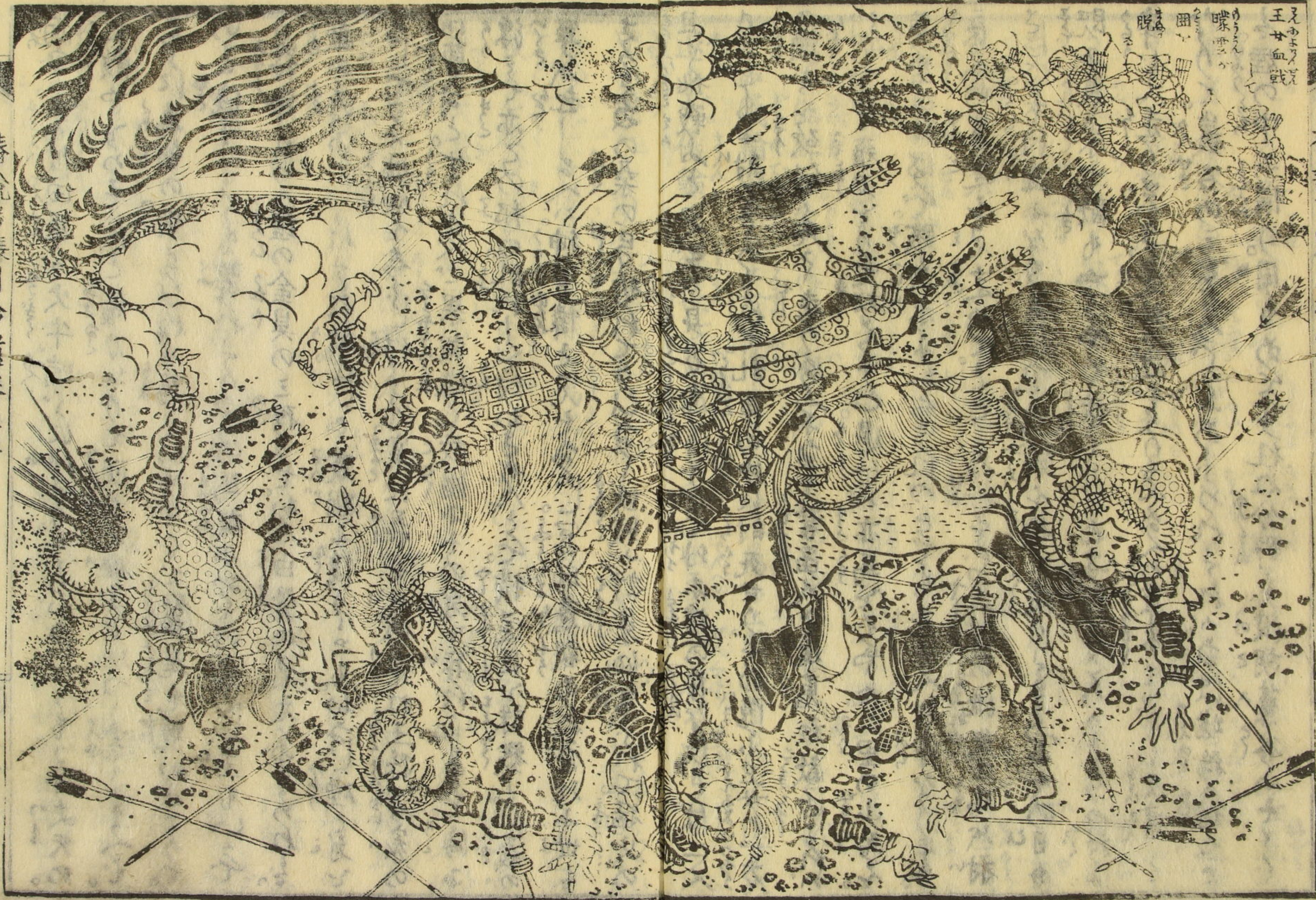
らつりて。漏くと。燃。あ。が。れ。山。風。あ。ら。び。吹。荒。ま。り。猛。火。口。面。ふ。散。乱。さ。馬。と。これ。お。駭。れ。狂。ひ。て。池。め。ぐ。り。馳。か。り。尾。筒。を。焼。き。煙。お。噴。ひ。賊。か。り。と。驚。さ。り。為。朝。へ。水。陸。の。軍。お。熟。て。万。夫。を。當。の。勇。将。な。れ。ども。火。を。脱。れ。ぬ。術。な。く。て。あ。ど。じ。う。経。り。と。り。て。うち。拂。ひ。ま。ど。も。その。刃。金。石。お。あ。ら。ざ。れ。上。差。の。征。前。鎧。の。威。毛。直。舞。の。袖。中。でも。悉。焼。断。離。れ。烈。火。の。中。に。ま。ま。ふ。その。形。勢。は。正。ふ。足。駿。河。の。牧。よ。田。獵。せ。し。日本。武。尊。に。似。たり。され。と。吹。く。と。風。も。あ。ら。て。今。ハ。四。う。と。お。げ。せ。く。が。鶴。の。丸。の。劔。引。抜。つ。腹。帶。前。方。て。鎧。投。ぎ。て。天。を。仰。ぎ。て。嘆。息。し。時。う。あ。る。命。が。れ。う。保。元。の。乱。さ。より。死。と。ん。命。が。い。く。な。び。脱。れ。て。こゝ。に。漂。著。し。今。妓。賊。が。幻。術。お。火。攻。せ。れ。て。め。く。も。武。名。を。他。の。困。は。道。と。あ。ら。朽。を。叫。び。ま。ふ。声。の。こ。煙。

の中に交えて今を限りと見えたりまふ。さる後小玉女の大里の山  
 路より。矇雲が背を襲ふて。まづ間諜者入りて合戦のやうを  
 ばし。ゆめゆめそのの走りかたり。まて八郎按司の大軍戦ふ毎々  
 勝おあつたといふことおく浦添宜野湾の兩城を攻おとし既  
 赤平まで殺入り多ひぬと告めけし。ばさらばいそげとて百騎を  
 残し。ちかえて大里の城をちりし儀。輪田平以下二百騎。只得て溜  
 中ふ山路二里むり進。まらふ。忽地日の光暗くる。應よ嶋袋  
 のかたにあたりて。猛火天中衝て燃あづれば。王女ふり怪とて。われを  
 いう。中。こごうや。馬を駐めてえ。りのま。結処。大里の城。ま  
 軍兵。半。刃。血。塗。れて。走り。息。も。吻。あ。さ。ま。う。に。や。う。さ。そ  
 も。矇。雲。が。大。將。目。官。全。廣。が。四。五。百。の。軍。兵。天。より。や。降。らん。地

よりや。涌。ち。ん。王。女。の。城。を。出。り。み。次。窺。ひ。知。り。直。と。推。考。せ。嘯  
 叫。で。攻。り。お。れ。小。城。中。以。の。外。に。全。勢。な。れ。命。を。限。り。に。防。ぎ。戦。へ  
 とも。力。彼。敵。か。り。城。兵。悉。く。討。死。せ。り。吾。侍。の。緯。の。越。を。り。ま。え  
 と。て。走。り。ま。は。る。屋。を。か。り。の。り。を。ま。お。小。祿。の。峯。南。風。原。東。同。平  
 の。城。な。ん。ぞ。も。敵。を。棄。れ。り。と。ま。り。し。れ。と。半。々。け。田。平。儀。翰。亦  
 こ。ろ。く。い。う。中。と。呆。れ。果。士。卒。送。お。面。を。あ。い。し。進。退。究。て。え。ん。え。ん  
 折。り。の。矇。雲。が。大。將。棟。孫。捷。路。より。は。し。り。り。入。數。百。の。軍。兵。勿。忽。然  
 と。前。面。の。峯。上。お。ま。の。り。は。ホ。ち。と。ぎ。や。為。朝。と。長。川。の。石。り  
 少。て。一。千。の。士。卒。炒。り。お。れ。勢。ど。り。れ。竟。小。嶋。袋。お。感。ひ。入。り。て。猛。火  
 の。う。ち。中。身。を。お。け。ば。灰。燼。を。り。て。う。せ。ね。る。に。命。を。し。り。り。寧。王。女  
 を。捕。ち。て。降。ふ。糸。せ。よ。と。呼。ぶ。声。は。谷。お。響。き。嶺。お。答。え。く。駭。り。く

真逆おとしに馳よとれが王女と馬と馳めし小さかじれかる荒の  
 葦。身この國の寧王女。紫名と良人とともに裏く白縫姫とち  
 がる。女子とて侮らば目おぼえんと合する。薙刀水車の如く  
 うら繞し。近づく敵をかけ惱し。やうとんと斫伏せし人の案内  
 ありし。これ賊兵。是首の樹の蔭。彼首の巖角。まきこられ射る。箭  
 とを各鐘の花ぶごころ。これさう防ぎかひ。うらや後方よりも賊將全廣  
 大里の城を攻おとし。王女。追留め。擒ふせんと。夥の軍兵を引込し。  
 吐と嘔てとせ。身れが身方。まき辟易し。文お戦ふ。うらうらわく。  
 勢。活路を索う。ひて射ておとされ死さる。りその数と。うらうら  
 中。小儀。翰田平。王女と落し。まか。せん。為。中。二騎。相。ま。れ。く。進。ま。ん  
 退。う。と。儀。翰。と。棟。孫。が。箭。面。ま。ま。向。ひ。田。平。の。全。廣。を。遮。り。留。め。て。

且く挑戦しと。しど。身方。悉。落。ら。せ。て。外。小。援。の。兵。が。け。し。ば。二。人  
 の。困。を。破。ひ。し。て。走。り。ま。あ。ふ。る。智。苗。人。と。追。蒐。れ。敵。近。よ。れ。ば  
 引。く。と。薙。刀。と。り。て。切。と。し。ひ。退。け。ば。亦。馬。と。も。や。や。二。里。の。山。路。を。  
 黄。昏。の。う。ら。は。で。賊。兵。お。お。ら。れ。つ。と。て。も。死。と。ん。れ。命。な。り。ま。も。  
 良。人。の。先。途。を。見。定。め。て。と。こ。ろ。一。と。ち。二。條。の。流。矢。と。馬。に。射  
 して。歩。行。ま。な。り。ま。ひ。つ。嶋。袋。を。投。て。走。り。ま。ま。つ。ふ。その。日。も  
 既。お。暮。果。て。敵。も。中。ら。や。く。遠。く。な。り。ぬ。子。四。の。こ。ろ。う。と。ま。の。終。り。  
 幸。じ。て。走。り。あ。き。是。処。う。と。ま。り。え。ま。へ。の。草。木。し。ん。ぐ。く。庚。燼。と  
 なり。て。巖。石。の。こ。と。ま。ら。ず。あ。あ。り。ん。と。れ。が。な。は。姥。孫。の。株。ま。さ  
 と。煙。の。中。小。横。り。同。も。め。と。れ。ぬ。分。野。を。彼。胡。蕙。谷。お。そ。く。く



王廿血戰

脱

田

吉田月打

吉田月打

而も亦また彼かの田た軍ぐんが火ひ牛うし喘あはぐに似にたり。うらかなしくもつが丈夫つまの  
 亡な散さんやとらとれと薙は刀やとりて灰はい木ぎと掻かきこりつつ索さく一いつも入いむ。  
 こゝに為な朝あさの乗のり多おほしぬる馬うまとおげくくて鬣は尾び毛け焼やかとよりて。  
 いと浅あままくも斃なれり。この馬うま既なかくのごとしし主しゅもいいて  
 う存ぞん命めいありん鎧よろいの金かね具ぐのの勢せいりて。おん白しろ骨こつの又またええああままりねも。  
 敵てきの兵へいふふととれれ飲うはしやや最さい期ご後ごももおおささじじ煙けとと身みを  
 ちしてて誠まこと心こころをを志ししし侍さむらい人ひと寔まことにに君きみとと日ひのの本もとれれ王わう孫そん名な家けの  
 曹そう司しととせせれれ多おほくく果くわ報ほう微ゐくく。故こ國こくふふそのその身みをを容ゆるめめとと海うみふ  
 浮うてて亦またこのこの邦くにのの乱らんれれとと討うちおおささめめんととてて稍や逆さか臣しんとと誅つと戮とくしし。仁に義ぎの  
 軍い兵へい起おこるるへへ神かみもも憐あはれれとと又またととああじじ冥みやう助すけ恣し報ほうめめををせせれれふふ世よを  
 ささららぬぬのの桑くわのの弓ゆみ折やれれててううひひささくく妖よう賊ぞくがが計けい策さくにに乗のりらられれてて猛まう火かの

中ちゆう小せう燒やれれくく武ぶ軍ぐんのの末すえハハ足あ非ひももあありりひひ出いづづババ七しち年ねんのの月つき日ひ  
 ももああららじじ無む陽やう月げつ小せう琉りゅう球きゅうのの鳴な北きたああててここののをを救すくひひままひひしし。ここのの良よ人ひとをを救すくひひははとと燒や野ののの雉けい子こつつままここひひふふ音ねととののここととななくくかかひひささや  
 とと声こゑ次つぎ張はりりかかれれ口くち説とくく。男おとこ子こままささららのの賢けん妻さい勇ゆう婦ふももここらら乱らん  
 れてて涌よみみぬぬ涙なみだのの石いし湯たう掬くめめどど黄わう々々泉せんへへああくくららんととてて半はん燒や孫そんのの  
 巨こ木ぎのの枝えだ引ひめめつつ免めんつつ烈れつ火かの中ちゆうへへ飛と入いららんととししたたままへへばば死しすす。馬うまのの腹はらの中ちゆうよりより。ややままささららとと嘆なげききとと免めん這い出でるるのの為ため朝あさのの  
 王わう女にょののああひひくくげげれれのの且かつ怪あやしし且かつ飲のびび。ここのの恙あやかかしてしてそのそのせせ一いつ飲のとと忙いそがが  
 ああらら走はりりよりより。同どうべべたたるるももああららじじふふ。好このむむ袖そでととぬぬららじじととああへへむむ。  
 為ため朝あさもも亦また王わう女にょのの只ただひひととりり。素す未み多たのの妖あや怪まじててままががそのその故ゆゑをを同どうままへへ。  
 王わう女にょハハ大だい里り山さんののああららじじめてて。崩お後ごのの敵てき攻せめととててられれ儀ぎ翰はん田でん平へい亦またを

とし兒にして士卒多く討死す。大里以下の城は全廣に集むるなりと  
 り。首尾を告ぐ。為朝頓ふ嘆息し。又も亦蒙雲が幻術は  
 とうくられて松壽鰐亀が生死存亡もあらず。白日俄頃も黑夜  
 とありて。おりのどこの鳩依お惑ひ入り。遂に火攻せられ。脱れ  
 ざるもあらず。されば今かうともしひ定めて刃を腹におく。當りか  
 借ともしえとそこをりて死す。馬の腹を截割。その血を吸て  
 咽喉を潤し。馬の腸を馳出して。その腹中を殺れ。かは辛く  
 猛火お焼すと。火とおのづから結りしが敵にあらざるとおりの  
 か。あや今までも出ざりた。あうれおん身も又賊軍と殺脱て。  
 夫婦のうきもに九死を生一死おひねれ。天地神明の祐  
 ありお似たり。凡功業はとて人とおりののと火とも踏水あも

入れおし。只堪がられを堪忍びて。時の到るお早のあまを  
 漢の高祖の七十餘戦も。九里山の戦お勝。四百餘別とあり。  
 され今松壽鰐亀お失ひて。左右の翼さしとしくとも。彼おも  
 又存命て。あおれる。は。ひとんお聚る。日もあま。さのり  
 城おがれ士卒お殺れて。この身お寓れ。かとも。夫婦が命を  
 天おま。して脱れ。あうれ。脱て。試ん。あう。び賊兵お出。あう。  
 悔。ごも。その。かひ。ある。さう。く。出。う。ま。い。そ。が。し。た。う。へ。  
 王女。火急。の。肘。は。縮。て。必。死。と。脱。れ。多。ひ。ね。れ。良。人。の。頼。智。を  
 感。嘆。し。夫。女。忙。し。く。嶋。袋。を。ま。り。出。て。通。霄。走。り。あ。う。あ。ゆ。ゆ。く  
 とも。あう。に。詰。且。具。志。派。の。あ。う。さ。か。れ。松。山。の。磯。お。あ。ま。あ。り。  
 あう。れ。ご。も。この。荒。破。を。あ。ひ。へ。渡。れ。小。嶋。も。な。く。いと。太。中。の。あ。る

春記月合書

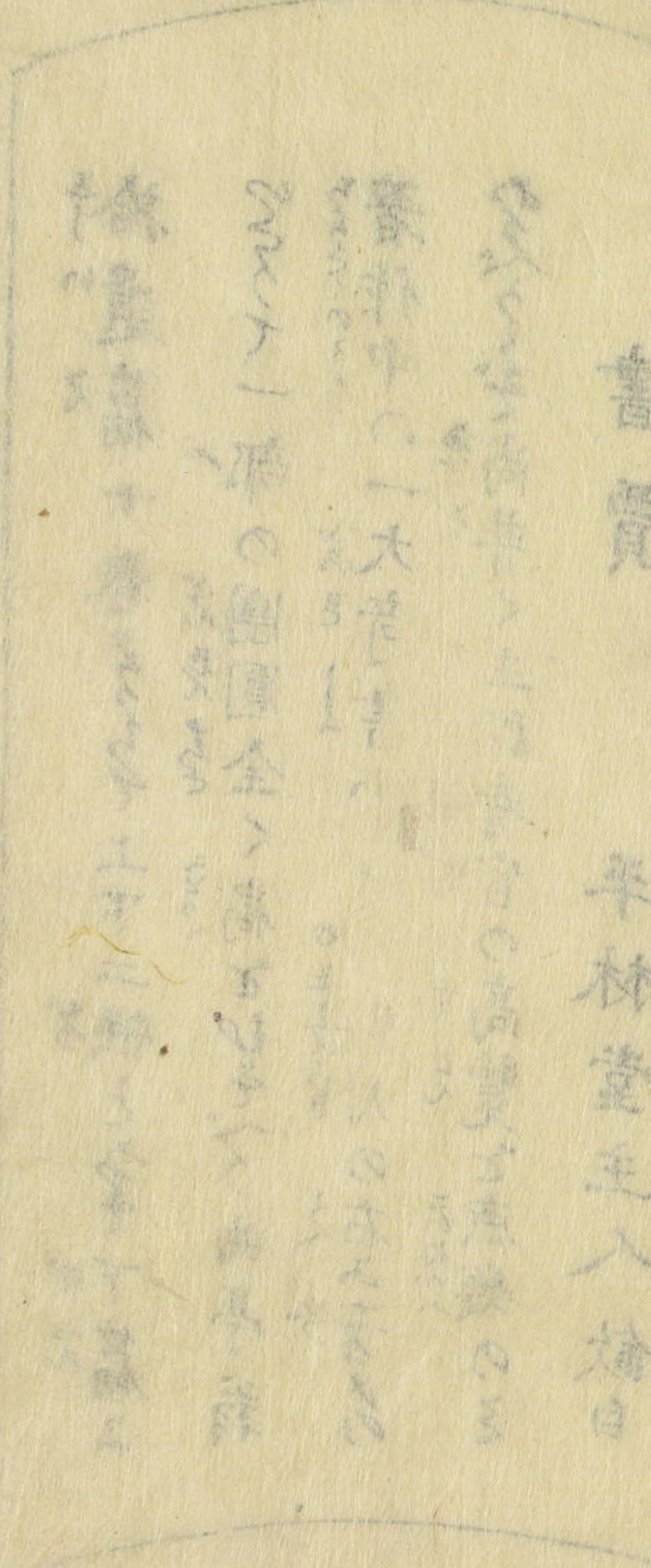
十三

蘆荻のこ敏あつて漁の蟹の台屋もあつた既小餓痕をこく。  
 今と一歩も運びぐとまればこゝろみせんとして夫婦巖下尻  
 次かけ忙然として坐を折くる。具志頭のかさふ物の音して  
 落人を捕捕まとり声聞らかく分えて多少とあつて城の  
 軍兵一群うらしてを吐まうた。為朝夫婦猛しとらぐもらこく  
 疲れとすへの御ぐはとぐま。前と海なりの後小敵の響お  
 脱まかく入なれ。蘆の中らに櫓の音として舟漕とるとおど  
 れが勿心地訛る声とく。

濱子鳥迹の都へかえりども。牙の松山小音とのこぞ鳴く。

それの日本の濱岐瀉これの琉球具志頭の荒磯もおほ名  
 あつた小島まの山の浦おまき。都へかえり小解をを讀  
 得て知るべし。

書費 半林堂主人繪



椿説弓張月拾遺卷之五畢

椿説弓張月拾遺卷之五







